人文韓国(HK)支援事業
海外地域事業団

NEWS LETTER

2010.12.21 Vol.3

高麗大学校日本研究センター
人文韓國(HK)支援事業海外地域事業団

(136-701) ソウル市 城北区 安岩洞5街 65番地 高麗大学校 青山・MK文化館
Tel. (02) 3290-2592 **Fax.** (02) 3290-2538
E-mail: kujc@korea.ac.kr **Website:** www.kujc.kr

高麗大学校日本研究センター
Center for Japanese Studies, Korea University

目次

人文韓国(HK)支援事業
海外地域事業団
高麗大学校日本研究センター

発行人：崔 官
発行所：高麗大学校日本研究センター
発行日：2010.12.21

03 ◆ 所長挨拶

04 ◆ 研究センターおよびHK事業団紹介

06 ◆ 2010年度主要事業
『日本文化事典』発刊
『ジャパンレビュー2010』発刊
日本叢書シリーズ
土台研究事業
学術活動
研究機関交流
奨学事業
日本翻訳院
日本関連文献検索システム構築

26 ◆ 機関誌『日本研究』

27 ◆ 所長動静

28 ◆ 事業団動静

30 ◆ 学術交流参加記

32 ◆ 研究業績(HK研究構成員)

37 ◆ 2011年度事業計画

39 ◆ 研究センター構成員

所長挨拶

アンニョンハシムニカ?

2010年は韓国強制併合100年、朝鮮戦争勃発60年、4.19革命50周年、光州民主化運動30周年といった、近現代史の大きな画期となる事件を振り返る記念碑的な年といえます。韓国は100年前に「国恥」となった時とは比べものにならないほどの驚くべき国家発展を成し遂げ、諸分野において日本という壁を乗り越え世界に向かっている姿さえみせているともいえます。しかし、日本研究という側面からいうと、日本関連資料の蓄積も、総合的日本研究も依然として道半ばであることを認めざるを得ません。

このような認識のもと、2010年を日本研究の転換期と位置づけ、数年前から様々な事業を行ってきました。春には、一年間の日本の動向をまとめた『ジャパンレビュー2010』を刊行し、夏には国内初となる『日本文化事典』を刊行しました。また国内の日本研究機関長らとのラウンド・テーブルを開催し、のMOU協定を結ぶなど、日本研究のさらなる進展に向けての共同の一歩を踏み出しました。秋には朝鮮、満州、台湾における植民地文学を比較考察する国際シンポジウムを開催し、冬には「戦争と平和」という視角から東アジア共同体を模索する国際学術大会を開催いたしました。また、土台研究事業の成果として開化期から1945年までの満洲と朝鮮にて刊行された日本語単行本・雑誌の目録集と目次集の刊行が予定されております。これらの諸事業を通じて、日韓関係の特殊性を背景とした主体的研究から一歩進んで、海外の研究者らとネットワークを構築し、普遍的かつ国際的な研究、ポストモダン時代に適合した体系的かつ総合的な研究風土を作り上げるよう努力しております。

なおかつ、解放後から現在までの日本関連文献検索システムを完成させ、資料基盤構築と基本情報を提供する場をつくりました。現在、著書検索システム構築を進めております。日本叢書シリーズも引き続き刊行し、本年は3冊が文化体育観光部優秀学術図書に選定されるという嬉しい知らせもありました。さらに機関誌『日本研究』が韓国研究財団の登載候補誌から登載誌へと昇格が期待されます。

こうした事業は、研究センター各構成員がビジョンを共有したがうえに成し遂げられたものであると内心自負しておりますが、他方で韓国研究財団による支援、また当センターの諮問委員の方々、交流協定機関、後援機関の物心両面からのご支援の賜物であると思います。この場をお借りし、あらためて感謝の言葉を申し上げます。

これからも片時も初心を忘れることなく体制整備に努めつつ、広く深い根を張っていけるよう精進してまいります。これまで同様、当センターの成長を暖かく見守り、ご教示くださいますようお願い申し上げるとともに、皆様方のご健勝を心よりお祈りいたします。

カムサハムニダ。

2011年 正月 吉日

日本研究センター所長　**崔 官**拝上

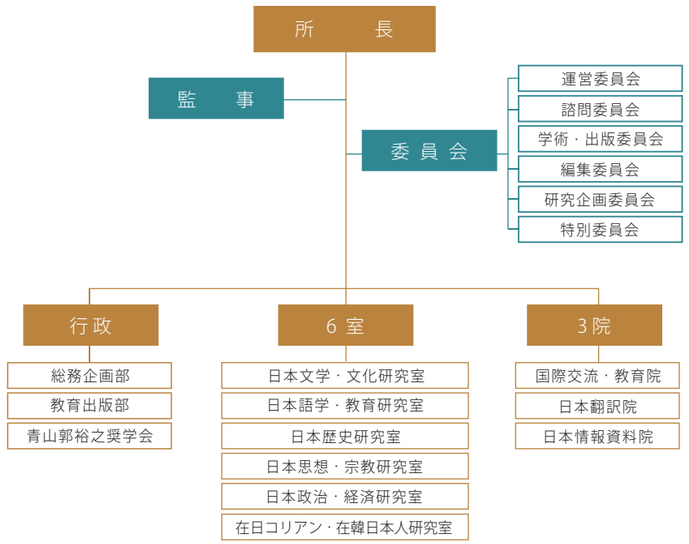
研究センターおよび HK事業団紹介

1. 研究センター紹介

高麗大学校日本研究センターは、日本に関する諸分野を主体的な立場から総合的に研究することを目的として設立された。2007年には人文韓国(HK)支援事業の海外地域研究事業団として選定され、翌2008年には、未来志向的な研究方法論の構築と体系的な研究の必要性に積極的に対応し、21世紀の日本研究を主導するという趣旨から、日本学研究センターから日本研究センターへと名称変更し、学術プログラム開発およびネットワーク構築に邁進している。

2. 研究センター組織図

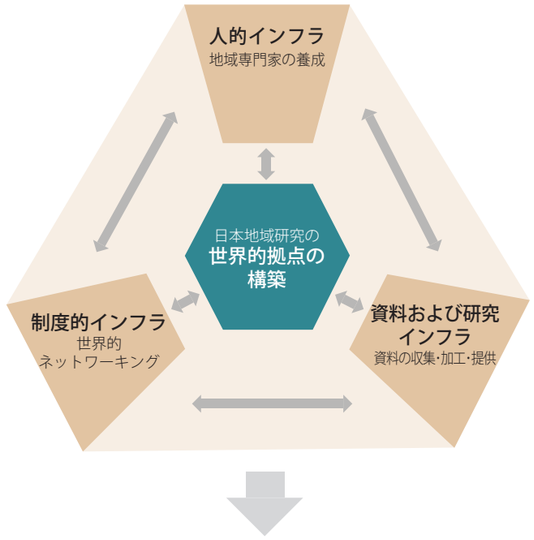
当センターは、主体的・体系的・総合的な日本研究を効果的に企画し、推進するために6つの委員会、6つの研究室(6室)、3つの学術実践機構(3院)、2つの行政部署と１つの奨学会を設け、有機的に業務を遂行している。



3. HK事業団の紹介

当センターは2007年11月に人文韓国(HK)支援事業海外地域研究分野において唯一の日本研究事業団に選定され、世界的な日本研究の拠点を構築するという目標のもと、研究および交流活動を展開している。このため、韓国内の日本関連研究機関と有機的に連携しつつ、韓国内の中心的な研究機関としての役割を果たす一方、日本、中国などアジア各地域の研究機関とのネットワークを通じてアジアにおける日本研究のハブとしての役割を果たそうとしている。このような漸進的なネットワーク構築を通じて、究極的には全世界における日本研究の発信者として主導的役割を担っていこうと考えている。

世界水準のインフラ構築



日本研究センター人文韓国(HK)支援事業目標の実行
- 日本研究の世界的ハブ構築 -

- 人文学に基づいた総合的日本研究
- 学際的研究に基づいた日本研究
- 日本地域専門家の養成による日本研究の人的インフラ構築
- 日本地域資料の蓄積による日本研究の拠点確保

2010年度
主要事業

◈『日本文化事典』発刊

当研究センターの最優先事業の一つである『日本文化事典』(2010年7月刊)は、体系的な日本研究の基盤を確立するため、研究センター〈3院6室〉を含め全国130名に及ぶ各界最高の専門家の手によりなったものである。

内容は政治、経済、文学、産業、司法、教育、科学、技術、医学、環境、メディア、スポーツ、人名、地名などの2,200余項目と付録とで構成され、日本の文化を網羅するという点において、解放以降の韓国において初の事業であるといえる。国内の諸学問分野への基礎的資料の提供によって学際的研究を促し、さらに一般市民の日本理解を深めるために役立つことが期待される。『日本文化事典』は、国内の日本研究を先導する研究機関である当研究センター10年の歴史の結実といえよう。

“事典編纂作業は2007年11月高麗大日本研究センターが人文韓国事業の海外地域研究事業団として選定されてから本格的に進められたが、その種は10年前すでに蒔かれていた。日本を総合的に理解しうる事典、日本語版の翻訳ではなく韓国の研究者の視点による事典、そのような事典刊行を目標として努力した末に、今回『日本文化事典』という名で刊行することになった”-〈発刊辞より〉-

〈『中央日報』8月12日〉

『日本文化事典』は国内で初めて試みられた膨大な作業であったがゆえにその意義も大きいといえる。種々のメディアでも〈話題の本〉として紹介され、〈学問の基礎の基礎である事典編纂が持つ意義〉が大きく報道された。

〈『教授新聞』9月6日〉〈『月刊朝鮮』10月号〉

◈『ジャパンレビュー2010』発刊

学際的研究によって構成される当研究センターの特性を活かし、当該年度の日本社会の動向を多角的な視野から分析・展望するため〈日本年鑑〉の発刊計画を立てた。当初の計画通り、国内の日本関連専門家を執筆陣として『ジャパンレビュー2010』(2010年4月)が発刊された。総論と16項目にわたる論文が収録された『ジャパンレビュー2010』は、当該年度の巨視的動向、諸般の論点・争点、主要懸案に関するデータや情報、そして今後の展望とオルタナティブの提示で構成されている。

本書は、第１部政治と外交、第2部経済と労働、第3部社会、歴史、教育、第4部文学と文化の４分野に分かれ、日韓関係、国内政治1(選挙/政党)、国内政治2(行政/官僚)、外交/安保、地方、国内経済、対外経済、労働/厚生、歴史、文学/思潮、大衆文化1(放送)、大衆文化2(映画)、ジャーナリズム、生活/社会、在日コリアン、教育など、16分野の論文を収録している。

◈ 日本叢書シリーズ

当研究センターでは、韓国内の体系的な日本文化の研究風土を定着させるとともに、日本文化に対する韓国人の理解を深めるため、「日本叢書シリーズ」を刊行している。

1.「日本学叢書」

「日本学叢書」は日本の文化、歴史、文学、語学、教育などに関する学術書で構成されている。2010年に刊行された８冊の内、３冊が文化体育観光部から2010年度「優秀学術図書」として選定され、本叢書シリーズの学問水準が認定された。

『壬辰倭乱関連日本文献解題』崔官･金時德著　★2010年度文化体育観光部優秀学術図書★

壬辰倭乱に関する近世日本の文献解題集。本書には、160点あまりの文献が収載されており、近世日本の壬辰倭乱文献集としては最大規模のものである。収録文献は日韓両国の学界に知られてないものも多く、当該研究への有益な情報を提供している。

『日本語教育と談話分析』曺英南著　★2010年度文化体育観光部優秀学術図書★

人間の言語習得過程を具体的に提示し、それを日本語教育に適用するための基礎研究である。日本語教育および言語文化的研究基盤を構築し、口語体言語の現状把握に主眼が置かれている。

『恋愛と文明-明治時代日本の恋愛表象』宋惠敬著　★2010年度文化体育観光部優秀学術図書★

明治時代の啓蒙知識人によって主唱された恋愛言説が、当時の新聞・雑誌などのメディアを通して青年知識人へと受容・浸透した過程を追求する。種々の文学作品を通して、恋愛言説が具体的な像として形象化されたあり様を分析している。

『近代以後の日本の教育』韓龍震著

日韓の教育交流史に関する論文を集めた著作。明治初期の教育改革の状況や当時の日本人の韓国教育に対する認識を明らかにし、戦後日本の教育改革の動向を分析したものである。

『近代日本の恋愛観』厨川白村著　李承信訳

1920年初、日本で起きた過去に類例のない恋愛ブームのバイブルになった書物。一般大衆の趣向に符合した近代西欧の恋愛思想の概説書としての本書は、当時の青少年や女性らの幅広い支持や関心を呼び起こし、ベストセラーとなった。

『幻想と怪談』日本古典文学・文化研究会編

本書は、日本古典文学の中で幻想や怪談を素材にしている物語に関する論文で構成されている。幽霊や鬼などが登場する物語だけでなく、超自然・超現実的、怪異、神秘など、多様な性格を持つ怪談は、われわれを日本古典の世界への時間旅行に導いてくれる。

『〈植民地〉日本語文学論』神谷忠孝・木村一信編　鄭炳浩ほか5名訳

日本における植民地文学研究の最前線にいる研究者の手になる最新研究書『〈外地〉日本語文学論』の翻訳書。自国中心的に進められてきた研究状況から排除されてきた帝国日本の植民地・占領地の日本語文学を本格的に分析したものである。

『帝国の移動と植民地朝鮮の日本人』植民地日本語文学·文化研究会著

2008年に発足した植民地日本語文学・文化研究会の研究成果。京城で刊行された日本語総合雑誌『朝鮮』(1908～1911)を主な分析対象にし、日本帝国の言説が在韓日本人メディアによっていかに再現され、拡大・再生産されたのかを分析したものである。

2.「日本名作叢書」

韓国で未刊行の物語文学･謡曲･狂言･俳句などの古典や名作を翻訳･出版するシリーズ。

『徒然草』吉田兼好著、金忠永・嚴仁卿訳

僧侶でもあり、多くの文学作品を残した吉田兼好の『徒然草』を翻訳。多くの日本人に愛読されてきた中世の代表的な随筆集である『徒然草』は、人生論、仏教信仰論、人間観、女性論、住居論、趣味論などの多様な内容が含まれている。

『日本怪談集』ラフカディオ・ハーン著、金時德訳

イギリス系アメリカ人作家である著者が日本各地にさまざまな形で存在する伝説や古典を小説化し、ひとつにまとめた作品集である。怪談17編と個人の体験などからなる。

『落窪物語』朴姸貞・朴恩姫・辛在仁・兪仁淑訳

10世紀末の作者未詳の物語文学を翻訳したものである。「日本古代のシンデレラ物語」という副題からも分かるように、継母と継子をモチーフにした物語である。

『完訳 日本語雑誌『朝鮮』文芸欄』植民地日本語文学・文化研究会訳

京城で発行された日本語総合雑誌『朝鮮』(1908～1911)文芸欄の完訳。在韓日本語メディアは、朝鮮社会とは区分される優越的文化共同体を構築する目的で発行されたため、文芸欄には、小説、エッセイだけでなく、俳句や和歌、漢詩なども掲載されている。

『武士道』新渡戸稲造著　日本古典研究会訳

1900年にアメリカで刊行された新渡戸稲造『BUSHIDO-The Soul of Japan』を翻訳したもの。今回の韓国語版『武士道』は、英語版と日本語版を参考にしながら翻訳したため、より客観的かつ内容を把握しやすい翻訳となったといえる。

『泉鏡花の黒い猫』泉鏡花著　嚴仁卿訳

日本の幻想文学の独自的な道を切り開いた泉鏡花の小説3編を綴った作品集である。破綻した愛や数奇な運命を共通のパターンとする三つの作品には、主人公の欲望や執念により自ら破綻していく過程が夢幻的に描かれている。

3.「現代日本叢書」

現代日本語・現代日本文学だけでなく、政治、社会、文化、経済、環境、教育などの諸分野を紹介するために新しく企画されたシリーズである。社会的・学問的にもその必要性が切実な分野で、かつ現代日本の多様な側面が窺われる書物で構成されている。

『月島物語』四方田犬彦著　金孝順訳

日本の庶民生活がそのままに残されている代表的な下町・月島の歴史やその文化的背景が、著者の体験をベースにして綴られたエッセイである。月島の歴史、遺跡、伝説、現在の姿などが平易な文体で叙述されている。

『共に行う多文化教育』倉地暁美著　HIRO研究会訳

〈多文化家庭〉という用語が一般的に使われるようになった現在、教育現場での多文化教育が抱える困難をいかに解決しうるかという問題意識が貫かれている。多文化教育をより包括的な視点から論じ、今日の教育問題に対する示唆を与えてくれる。

『聖書で読むアメリカ』石黒マリーローズ著　金春美訳

国際結婚により日本に住むようになった著者は、いくつかの大学で英語教育を担っている。「GOD's　Country(神様の国)」とも呼ばれるアメリカの真の姿、すなわち、キリスト教の価値観や生活様式を有するアメリカやアメリカ社会について、聖書に基づいて論じている。

『多文化共生指向の在日韓・朝鮮人』徐龍達著　徐潤純訳

1933年に釜山で生まれ、1942年に日本に渡り、以後68年間日本で暮した著者が、在日韓国人一世としての在日韓・朝鮮人の形成史および現在の地位や今後の課題について論じた著作。アジア市民社会の構築や多民族共生を望む著者の心が示されている。

『在日コリアンの100年を考える』鄭燦源著

駐名古屋総領事を歴任した、本センター在日コリアン･在韓日本人研究室長である著者が在日コリアンの歴史と現況、そして在日コリアンの意識調査をもとに著した書物である。

◈ 土台研究事業

土台研究チームは鄭炳浩教授を研究責任者として研究教授9名、博士課程研究員7名、資料調査員40名からなる大規模研究チームである。人文・社会科学諸分野の基礎研究資料を提供することで後続研究の基盤となることを目的として、1868年から1945年までに朝鮮半島、中国、満洲で刊行された日本語文献の調査に取り組んできた。

2002年から2006年までの基礎調査を通して入手した資料に基づき、韓国、中国、日本の国公立図書館と大学図書館所蔵の全資料うち、朝鮮半島・満洲で刊行された資料を調査してきた。その成果として、1868年から1945年までの朝鮮半島および満洲地域で刊行された日本語の単行本と年次刊行物の目録集と目次集を刊行する予定である。

本書には朝鮮半島で刊行された年次刊行物500余件、単行本15,000余件と、満洲地域で刊行された年次刊行物1,000余件、単行本35,000余件とが収録されている。また、資料所蔵図書館は韓国17ヶ所、中国60余ヶ所、日本100余ヶ所に及んでいる。全資料に対し所蔵先を明記することで、研究者にとって有意義な情報を提供している。なお、本目録・目次集刊行により、東アジアの歴史において桎梏期であった日本植民地支配と過去の実状をより豊かに明らかにすることができると思われる。同時に、この時期の東アジア地域に関する多様な学問の創出も期待される。

『韓半島·満洲(東北3省)の日本語文献(1868-1945)目録集』(全10巻、図書出版ムン、近刊)
『韓半島·満洲の日本語文献(1868-1945)目次集』(全50巻、図書出版ムン、近刊)

◈ 学術活動

1. 国際学術大会

❖ 帝国日本の移動と東アジア植民地文学

当研究センターでは、HK事業の核心研究の一つとして〈植民地日本語文学・文化研究〉を推進してきた。その一環として2010年10月7日・8日の両日にかけて《帝国日本の移動と東アジア植民地文学》というテーマで国際学術シンポジウムが開かれた。

シンポジウムには、韓国、日本、中国、台湾の日本語文学の研究者が参加し、国内外の植民地日本語文学の実態を把握する場となった。また、国際社会、特に東アジア地域における日本語文学に関する共同研究の可能性も模索した。

〈一日目〉

韓国、中国、台湾の植民地日本語文学を概括し、東アジアの植民地日本語文学の共同研究の必要性とその方案をめぐって活発な議論が繰り広げられた。

- **日時:** 2010年10月7日(木)
- **場所:** 高麗大日本研究センター青山·MK文化館
- 通訳(韓·中)

15:00-15:10	**司　会：**張東天(高麗大) **開会の辞：**崔官(高麗大日本研究センター所長)
15:10-16:40	• 植民地という枠組みから東アジアという視角へ-台湾文学研究に関する回顧- ▸ 陳芳明(台湾政治大学) • 「満洲」時代の「新京」の日本人作家 ▸ 劉春英(東北師範大学) • 朝鮮半島の植民地〈日本語文学〉の研究と課題 -植民地〈日本語文学〉の国際共同研究の提案- ▸ 鄭炳浩(高麗大)
16:40-18:00	総合討論:　金良守(東国大),　權ボドゥレ(高麗大)

〈陳芳明氏〉

〈劉春英氏〉

〈総合討論〉

〈二日目〉

韓国の日本語文学の実態を時期を追って把握するとともに、日本、満州、南方は勿論、アメリカにも視野を広げて移民者の日本語文学について眺望する機会となった。

- **日時：**2010年10月8日(金)
- **場所:** 高麗大100周年記念館国際遠隔会議室
- 通訳(韓·日)

10:00−10:30	司　会　徐承元(高麗大) 歓迎の辞　崔官(高麗大日本研究センター所長) 祝　辞　朴性奎(高麗大文科大学長)
10:30−11:30	**第一部 韓国の日本語文学** 司会:蔡淑香(白石大) ・韓日併合前後の日本語雑誌に見る韓国史観 -日本語雑誌『朝鮮』と『朝鮮公論』の歴史物を中心に- ▸ 金青均(高麗大日本研究センター) ・李光洙の二重語文学の考察 ▸ 李承信(高麗大日本研究センター) ・韓国モダニズム文学における日本語創作-鄭芝溶の日本語詩作を中心に- ▸ 兪在眞(高麗大)/金孝順(高麗大日本研究センター) ・植民地朝鮮の文学者と雑誌『文芸首都』 ▸ 金季杅(暻園大アジア文化研究所)
11:40−12:20	・1930年代末「血」の言説と日本語文学 ▸ 尹大石(明知大) ・佐多稲子の朝鮮体験と二言語状況認識 ▸ 宋惠敬(高麗大日本研究センター)
12:20−12:50	総合討論 司会: 李志炯(淑明女子大) 討論: 朴光賢(東国大)、申寅燮(建国大)
14:20−16:20	**第二部　移植・植民者の日本語文学** 司会:金成恩(高麗大日本研究センター) ・1930年代日本文学における「野蛮」への共鳴をめぐって ▸ 垂水千恵(横浜国立大学) ・「満州国」初期日本語文壇の〈満州文学論〉 ▸ 柳水晶(高麗大日本研究センター) ・「満州文学」と日本文壇-日本人作家を中心に- ▸ 池内輝雄(国学院大学名誉教授) ・南方徴用作家の言説-〈ジャワ〉を中心に- ▸ 木村一信(立命館大学名誉教授) ・境域から読めること-日系アメリカ移民の日本語文学- ▸ 日比嘉高(名古屋大学)
16:40−18:00	総合討論 司会: 鄭炳浩(高麗大) 討論: 朴裕河(世宗大) 坪井秀人(名古屋大学) 陳芳明(台湾政治大学) 劉春英(東北師範大学)

〈木村一信氏〉

〈池内輝雄氏〉

〈総合討論〉

〈発表者・討論者〉

❖ 戦争と平和からみる東アジアの社会文化地形図

〈東アジアの戦争と平和、そして共同体研究会〉は、現在、主として経済領域が先導する東アジア共同体に関する議論に戦争論と平和論、また各国の政治と文化、歴史的背景をいかに接合しうるかといった議論を続けながら、韓国的アイデンティティーを問い直してきた。その成果をもとに東北亜歴史財団との共催で《戦争と平和からみる東アジアの社会文化地形図》をテーマに国際学術大会を開催した。今回の大会では、東アジア共同体言説を形成するための前提となる東アジアとモンゴルの戦争・平和・共同体論に関して、日中韓の研究者 7名の基調講演および研究発表が行われた。

- **日時:** 2010年12月3日(金)
- **場所:** 高麗大日本研究センター青山・ＭＫ文化館

10:00−10:20	開会の辞　鄭炳浩(高麗大日本研究センター副所長)
第1部 10:20−14:20	第1部 司会: 宋浣範(高麗大日本研究センター) 基調講演 ・武力と国家形成-戦争の考古学からみた４～６世紀の韓半島と日本列島- ▸ 松木武彦(岡山大学) ・倭寇と東アジア平和のための朝鮮の変容　▸ 金普漢(檀国大) コメンテーター : 尹裕淑(東北亜歴史財団) ・東アジア平和構築の困難 -壬辰倭乱の和議交渉関連者に対する三国の評価を通じて- ▸ 金時德(高麗大日本研究センター) コメンテーター : 盧永九(国防大) ・クビライ政府の南海政策と海外貿易の繁栄 -モンゴル時代の戦争、平和、パックス・モンゴリカ(Pax Mongolica)のシナリオ ▸ 高明秀(徳成女子大) コメンテーター : 李錫炫(延世大)

第2部 司会:朴洪圭(高麗大)	
第2部 14:20−16:40	・韓国独立運動百年の文学叙事-韓国人を題材とした中国小説を中心に- ▸呉敏(華東政法大学) コメンテーター : 辛炫承(高麗大亜細亜問題研究所)
	・安重根の伊藤博文狙撃事件と韓国併合 ▸方光錫(仁荷大) コメンテーター : 柳芝娥(中央大)
	・EPA戦略と東アジア共同体に対する批判的検討 ▸姜喆九(高麗大日本研究センター) コメンテーター : 洪秦伊(ソウル大)
16:40−17:40	総合討論 司会 :趙明哲(高麗大)

松木武彦氏(上), 総合討論(下)

参加者

2. その他国際学術大会

① 若手研究者未来構築フォーラム

2010年5月14日と15日、本研究センターと高麗大BK21中日言語文化教育研究団との共同主管、高麗大日語日文学科、北京日本研究センター、台湾政治大学日語系の共同主催による国際学術大会が高麗大国際館で開催された。《東アジア共同体と日本研究》というテーマで、韓国、日本、中国、台湾など4ヶ国の研究者が参加したこの大会では、若手研究者たちの意欲のある43件の研究発表と議論を通じて活発な学術交流が行われた。

② 第40回東アジア古代学会春季学術大会

2010年6月5日、東アジア古代学会春季学術大会が本研究センターの後援により青山・MK文化館円形講義室で開かれた。昨年の第39回大会に続いて本年は6件の研究発表が行われ、熱のこもった議論が交された。

③ 高麗大学校·筑波大学共同研究集会

2010年8月18日、本研究センターと筑波大学人文社会科学研究科との共同主管で、高麗大学校・筑波大学共同研究集会が青山・MK文化館円形講義室と遠隔画像会議室で開催された。この学術行事は、《韓国併合100年をめぐる帝国の旅行》《帝国・アジア・移動》《アジアとの多様な文化融合》というテーマをもって進行された。基調講演の浜名恵美教授（筑波大)、青柳悦子教授(同)、鄭炳浩教授(高麗大)をはじめとした両校所属の研究者を中心に、各国の日本研究者が多数参加した。

④ 第1回東アジア比較文化研究会学術シンポジウム

2010年9月9日、東アジア比較文化研究会と日本学術振興会とが共同主催した第1回東アジア比較文化研究会学術シンポジウムが、本研究センターの後援で開かれた。《戦後アジアとアメリカの肖像》というテーマで開催されたこのシンポジウムでは、アメリカ占領期の日本のメディア政策と冷戦期アメリカの広報外交、電波戦争としての朝鮮戦争などに関する研究発表が行われた。

3. コロキウム

本研究センターは、研究力向上のために、海外で活躍する日本研究者を招いてのコロキウムを開催している。本年は日本から島根県立大学の福原裕二教授、関西学院大学の森田雅也教授、そして中国の清華大学日本研究センターの李廷江教授と王中忱教授を招聘し、有意義な議論を交した。

コロキウム		
19回	8月 23日	独島(竹島)研究における第3の視角
		福原裕二(島根県立大学)
20回	11月 2日	西鶴文学の情報源-近世海運史との関係から
		森田雅也(関西学院大学)
21回	12月 17日	日中両国衝突の構造と特徴 - 戦後日中関係史の視点から
		李廷江(清華大学日本研究センター副所長)
		日中戦争前夜における日本の中国認識
		王中忱(清華大学人文社会科学学院)

福原裕二氏

森田雅也氏(中央)

王中忱氏(左)・李廷江氏(右)

4. 特別講演会

本研究センターでは、日本研究の専門研究者に限定せず、日本関連分野の一線で活躍する国内外の著名人を招いて特別講演会を開催している。

3月25日の講演者である韓国三菱商社(株)の粟谷勉代表理事には、韓国と日本の経済を展望し、日本企業と商社の役割を紹介していただいた。4月2日、BK21中日言語文化教育研究団との共同主管で開催された講演会では、小説家梁石日氏に《アジア的身体と闇の子供たち》というテーマで、自己中心化がもたらす差別化と自己疎外の問題について幅広くお話しいただいた。また、5月4日に開催された講演会では愼年晟東北亜歴史財団元事務総長が日中韓三国関係と歴史的争点を論じ、歴史葛藤をいかに解いていくかに対する回答を提示された。

粟谷勉氏

梁石日氏

愼年晟氏

鄭煥麒氏(中央)

5月27日の特別講演会は、愛知韓国学園の鄭煥麒名誉理事長を招聘して行われた。鄭理事長は在日韓国人の歴史の生き証人というべき人物であり、在日居留民団の創立初期から深く関わり、在日韓国人の地位向上のため尽力してきた方である。祖国の発展、日韓親善と次世代教育を志す鄭理事長の努力は現在進行形のものである。

10月20日の特別講演会には《日韓両国関係の発展方向》というテーマで金守漢元国会議長をお招きした。金元国会議長は日韓関係を歴史的に概観し、日韓基本条約反対運動に参加した経緯などを説明された。なによりも、山口女子大学に眠っていた寺内正毅文庫を刻苦の努力の末、1993年に返還実現に至ったくだりでは、場内から拍手が沸き起こった。「草の根交流」を目指し、アジア時代を展望した講演会には、本学史学科の趙珖教授をはじめ多数の方々が参加した。

金守漢氏

2010年度最後の特別講演会は11月4日に開かれた。講演者はアメリカの著名な日本史研究者であるハリー・ハルトゥニアン(Harry Harootunian)元ニューヨーク大学東アジア研究所長。代表作に " History's Disquiet(歴史の揺動) " などがある。《日本の戦後忘却と国際社会への進入》と題された講演会でハルトゥニアン氏は、第２次世界大戦以降の日本が国際社会のなかで取ってきた態度を顧みながら、日米関係がいかに東アジアの国際情勢に影響をもたらしてきたかについて鋭く分析された。情熱あふれた講演のあと、参加した大勢の聴衆との真摯な質疑応答が続いた。

ハリー・ハルトゥニアン氏

5. 日研フォーラム

日研フォーラムは、学内外の日本研究者の研究力向上と研究成果を市民らと共有しようという主旨から行われている。城北区庁との連携のもと、日研フォーラムの情報は城北区庁のホームページにも掲載されており、市民社会との疏通を目指している。日研フォーラムは、月1回定期的に開催されており、本研究センター所属研究者と外部の研究者が交代でその成果を報告している。

日研フォーラム	
6回 2.2	日本文化、ブームか、文化か ▸ 金智龍(文化評論家)
	討論: 李珍淑(国家ブランド委員会対外協力局事務官)／金姫廷(高麗大日本研究センター)
7回 3.8	正倉院宝物と文化財調査 ▸ 稲田奈津子(東京大学史料編纂所)
	討論: 李侑珍(崇実大)／宋浣範(高麗大日本研究センター)
8回 4.12	日本文化小考-囲碁文化を中心に- ▸ 金青均(高麗大日本研究センター)
	討論: 宋圭振(高麗大亜細亜問題研究所)／金仙熙(高麗大日本研究センター)
9回 5.10	日本の宗教、特にキリスト教の理解 ▸ 徐正敏(延世大)
	討論: 安鐘哲(仁荷大韓国学研究所)／金成恩(高麗大日本研究センター)
10回 6.14	日本明治期振り仮名の性格と役割 ▸ 李京圭(東義大)
	討論: 李暻洙(放送通信大)／金姫廷(高麗大日本研究センター)
11回 7.12	日本の「壬辰倭乱」文献の分類と特徴 ▸ 金時德(高麗大日本研究センター)
	討論: 金炳倫(国防日報)／柳水晶(高麗大日本研究センター)
12回 8.9	日本帝国末期、軍国歌謡に関する省察 ▸ 李東洵(嶺南大)
	討論: 李相雨(高麗大)／羅工洙(嶺南大)
13回 9.13	日帝強占期の日本語、その後60年 -延辺地域との比較- ▸ 黄永熙(高麗大日本研究センター)
	討論: 菊池正記(白石大) ／徐潤純(高麗大)
14回 10.6	日帝時代在日韓人の民族運動 ▸ 金仁德(成均館大東アジア歴史研究所)
	討論: 柳芝娥(中央大) ／李升熙(中央大)
15回 11.25	韓国と日本の文化交流 ▸ 本田修(日本国際交流基金ソウル文化センター所長)
	討論: 玄大松(国民大)／金時德(高麗大日本研究センター)
16回 12.13	日本のODA政策と韓国経済成長との因果関係 ▸ 姜喆九(高麗大日本研究センター)
	討論: 蘇淳昌(建国大)／宋錫源(慶熙大)

金智龍氏(左から3人目)

徐正敏氏(中央)

李京圭氏

金仁德氏

黄永熙氏

本田修氏(中央)

本研究センターは、2000年9月の日本学研究所開所記念国際学術シンポジウムをはじめ、数多くの国際学術大会および学術行事を開催してきた。その10年を振り返り、2000年から2009年までに本研究センターで行われた学術行事をまとめてみた。

国際学術大会		
2000.9.23	日本学研究所開所記念国際学術シンポジウム	**グローバリズムと韓日文化**
発表者	北原保雄、鈴木貞美、酒井直樹、新川登亀男、鄭在覚 他	
2001.4.27-4.28	日本学研究所・韓国日本学協会2001年度春季国際学術大会	**日本文化と東アジア**
発表者	岩本通弥、劉建輝、安藤宏、張哲俊、中根隆行、矢野尊義、成惠卿 他	
2001.11.24	日本学研究所2001年国際学術シンポジウム	**境界を越えて-日本文芸研究の新しい地平-**
発表者	東郷克美、小林保治、四方田犬彦、粕谷宏紀、金春美、金榮哲 他	
2002.5.3-5.4	日本学研究所・韓国日本学協会2002年度春季国際学術会議	**日本人の言語観**
発表者	神野志隆光、鈴木貞美、沖森卓也、鄭惠卿、康仁善 他	
2002.11.16	日本学研究所2002年度国際学術シンポジウム	**日本文化研究-その方法論の構築方案**
発表者	鈴木貞美、荒木正純、吉原ゆかり、金文煥、洪顯吉 他	
2003.12.13	日本学研究所2003年度国際学術シンポジウム	**東アジアにおける近代語の成立と交流**
発表者	飛田良文、陳力衛、朱京偉、佐藤武義、李漢燮、全亨式 他	
2004.11.18-11.19	日本学研究センター2004年度国際学術シンポジウム	**古代日韓関係の現在的意味と展望**
発表者	瀧音能之、新川登亀男、韓昇、李成市、金鉉球、李在碩 他	
2005.2.18-2.19	日本学研究センター韓国日本学会2005年度学術大会	**日本学の前近代・近代・脱近代**
発表者	金光林、古田島洋介、戸田貴子、井上優、矢沢真人、崔官、全亨式、任榮哲, 金弼東 他	
2005.10.26	日本学研究センター・日本裏千家共同パネルディスカッション	**東アジアの文化と平和**
発表者	千玄室、須藤真志、山折哲雄、小倉和夫、水谷幸正、劉金才、金容雲、崔官 他	

2005.11.19	日本学研究センター2005年度国際学術シンポジウム	**他者と文化表象**
発表者	川村湊、大野淳一、渡辺直紀、張海明、小倉和夫、金允植、朴婉緒、金春美、朴裕河 他	
2006.10.14	日本学研究センター2006年度国際学術シンポジウム	**東アジアの文化交流と相互理解**
発表者	川本皓嗣、四方田犬彦、上垣外憲一、劉建輝、川尻文彦、李御寧、崔官 他	
2006.11.10	日本学研究センター韓日現代作家シンポジウム	**文学の新地平-記憶・境界・メディア-**
発表者	島田雅彦、桐野夏生、申京淑、具孝書、金春美、禹燦濟 他	
2007.3.30-3.31	日本学研究センター国際学術シンポジウムおよび 高麗大・東京大合同研究セミナー	**東アジアで村上春樹を読む**
発表者	小森陽一、秦 剛、金春美、金重赫 、朴裕河、崔成實 他	
2007.10.13	日本学研究センター国際学術シンポジウム	**韓国・日本・東アジア**
発表者	奥島孝康、池明觀、ロバート・キャンベル、趙順文、徐一平、徐承元 他	
2008.10.7-10.8	「新日韓関係パートナシップ共同宣言」10周年記念 国際シンポジウム	**回想、懸案、そしてビジョン**
発表者	小倉紀蔵、重家俊範、船橋洋一、小渕優子、加藤紘一、小此木政夫、金大中、崔官、姜尚中、崔相龍、鄭求宗 他	
2009.3.9	日本研究センター国際学術シンポジウム	**グローバル時代の自国研究・他国研究**
発表者	宮内淳子、古田真一、香川檀、板垣博、新妻義輔、アンジェロ・イシ、金青均、全成坤 他	
2009.9.18	日本研究センター国際学術シンポジウム	**日本近世文学・文芸の中心と周縁**
発表者	延広真治、長島弘明、飯倉洋一、佐伯順子、鈴木淳、佐伯孝弘、金榮哲、崔京國、高永爛、朴熙永 他	

コロキウム			
第 1回	2008.3.6	近代日本のジェンダーイデオロギーに抵抗する『青鞜』の女性たち	
		大越愛子	近畿大学
		金子文子-天皇制国家・ジェンダーに対抗する思想	
		井桁碧	筑波学院大学
第 2回	2008.3.7	植民地的心性とは何か-京城帝国大学と在韓日本人	
		中根隆行	愛媛大学
第 3回	2008.3.18	旧韓国・朝鮮の〈内地人〉教員	
		稲葉継雄	九州大学韓国研究センター所長
第 4回	2008.3.20	ノスタルジアの彼方-1958年の表象をめぐって-	
		波潟剛	九州大学
第 5回	2008.5.7	中国通俗小説に対する両班と侍の共通点と相違点	
		Emanuel Yi　Pastreich	又松大学校
第 6回	2008.5.14	韓日相互理解は〈感動の交流〉から	
		小林直人	国際交流基金ソウル文化センター所長
第 7回	2008.5.16	社会的事件と文学表象-金閣寺焼失をめぐって-	
		木村一信	立命館大学文学部長
第 8回	2008.5.20	朝鮮侵略と秀吉政権の外交戦略	
		許南麟	University of British Columbia
第 9回	2008.5.22	韓国の民族主義と外交政策-対日対中政策を中心に-	
		文正仁	延世大学校

第 10回	2008.6.13	失業と文学	
		西原大輔	広島大学
		作家と書くという行為-漱石とミラン・クンデラの場合	
		李哲権	聖徳大学
第 11回	2008.6.19	日本の古典詩歌の流れと芭蕉の役割	
		清登典子	筑波大学
第 12回	2008.10.24	在日韓国人の生活と地方参政権問題-私の体験からの考察	
		徐龍達	桃山学院大学名誉教授
第 13回	2009.5.6	崔承喜：帝国日本を踊る-共通課題に挑戦する日韓協力の可能性〈人文社会学分野〉	
		松原孝俊	九州大学
第 14回	2009.6.19	靖国問題を考える	
		徐勝	立命館大学コリア研究センター所長
		18〜19世紀の日韓相互認識の転回	
		桂島宣弘	立命館大学コリア研究センター副所長
第 15回	2009.11.25	絵のある本・絵のない本-『伊勢物語』の板本をめぐって-	
		今西祐一郎	国文学研究資料館長
第 16回	2009.12.1	中国の日本研究	
		李卓	南開大学日本研究院長
		中国での韓国と日本のTVドラマ放送状況	
		程永明	天津社会科学院日本研究所
第 17回	2009.12.3	『源氏物語』の新しい読解の世界-大沢本『源氏物語』の出現をめぐって-	
		伊井春樹	前 国文学研究資料館長
		儒者の神学-新井白石の『鬼神論』を中心に-	
		W. J. Boot	ライデン大学
第 18回	2009.12.9	東アジア共同体建設と韓中日協力	
		郭定平	復旦大学日本研究センター所長
		中国での日本研究の現状と問題点	
		張浩川	復旦大学 日本研究センター副所長

特　別　講　演　会

2005.5.26	喜歌劇とクーデター	蓮實重彦	前 東京大 総長
2005.6.2	近代日本の〈聖徳太子〉作り	新川登亀男	早稲田大
2005.6.3	日本古代紀年論研究の現状と課題	鎌田元一	京都大
2005.6.20	言語学という接近	青木三郎	筑波大
2005.7.11	男性の語る歴史 /女性の語る歴史・物語	名波弘彰	筑波大
2005.9.13	桃源境の行方-竜宮と隠遁地へ行った男性たち	西島孜哉	武庫川女子大
2005.9.30	日本列島での漢字文化受容と地方豪族	佐藤信	東京大
2005.10.28	語り、伝えること	平野啓一郎	作家
2005.11.5	山東京伝と滝沢馬琴	大高洋司	国文学研究資料館
2006.9.5	〈なぞなぞ〉日本語の規則	伊藤健人	群馬県立女大
2006.11.23	谷崎文学の魅力-「痴人の愛」を中心に-	千葉俊二	早稲田大
2006.12.4	文学史を語る	亀井秀雄	市立小樽文学館長
2007.4.27	近世名句の誤読 日本漢文訓読について 古代人と山	長島弘明 月本雅幸 多田一臣	東京大
2007.6.1	詩を紡ぎ出すこと-日本近代の恋愛詩とイメージの共有-	菅原克也	東京大
2007.6.18	異国ことばに対する興味	亀井秀雄	市立小樽文学館長
2007.11.19	武士道と近代化	笠谷和比古	国際日本文化研究センター
2007.12.5	日韓文化交流10年の回顧とこれからの課題	小針進	静岡県立大
2008.3.5	海外で日本文学をどう読むか	Ted Goossen	York University
2008.5.1	炎の文章教室	島田雅彦	作家・法政大
2008.5.29	体験的日韓文化交流史	高橋妙子	日本公報文化院長
2009.3.27	日韓国民交流の現状と今後の課題	一寸木英多良	日本国際交流基金
2009.5.21	日本学から東北アジア学へ	池明觀	前 翰林大 日本学研究所長
2009.9.25	多文化共生社会を指向する在日韓朝鮮人	徐龍達	桃山学院大名誉教授
2009.10.20	文学に対する多様なアプローチ-桐野夏生『OUT』の女性たち	吉原ゆかり	筑波大
2009.11.9	民主党政権下の日本	田中均	前 日本国際交流センター 日本外務審議官
2009.12.17	日本近代文学における言文一致	安藤宏	東京大学

日研フォーラム

第 1回	2009.7.6	朝鮮後期と江戸時代の脱典型的女 性像についての小考-野談と浮世草子を中心に-	
		高永爛	高麗大日本研究センター
第 2回	2009.8.17	日帝時代の残滓と併合100年の課題	
		保坂祐二	世宗大
第 3回	2009.9.21	キリスト教に対する近世日本知識人の立場-林羅山を中心に-	
		金仙熙	高麗大日本研究センター
第 4回	2009.10.27	2010年の視点から眺望した古代日韓関係史	
		李成市	早稲田大
第 5回	2009.11.23	『源氏物語』と日本の建築文化	
		金秀美	高麗大

◈ 研究機関交流

2010年8月21日に国内日本研究機関の代表者ラウンド・テーブルが当研究センターで開かれた。2008年度第1回日本研究者ワークショップ(社会科学分野)と2009年度第2回日本研究者ワークショップ(人文社会科学分野)に続く今回の会議は、韓国併合100年を迎えた韓国における日本研究の現況と各機関の研究事業紹介や、今後の展望について議論が交された。国内の日本研究を先導する研究機関としての問題意識を共有するとともに、当研究センターとの学術交流協定締結式も挙行された。本年度のMOU締結機関は以下の通りである。

機関名	内容	日付
建国大学校 アジア･ディアスポラ研究所	MOU 締結	8. 21
暻園大学校 アジア文化研究所	MOU 締結	8. 21
国民大学校 日本学研究所	MOU 締結	8. 21
檀国大学校 日本研究所	MOU 締結	8. 21
東西大学校 日本研究センター	MOU 締結	8. 21
世宗研究所 日本研究センター	MOU 締結	8. 21
全南大学校 日本文化研究センター	MOU 締結	8. 21
中央大学校 日本研究所	MOU 締結	8. 21

ラウンド・テーブル

MOU締結: 崔官所長(左)、各機関長(右)

建国大 申寅燮所長

暻園大 朴眞秀所長

国民大 李元徳所長

檀国大 韓京子氏(鄭瀅所長代理)

東西大 鄭求宗所長

世宗研究所 陳昌洙所長

全南大 金貞禮所長

中央大 具廷鎬所長

◈ 奨学事業

当研究センターでは、2006年以降、韓国留学を希望する日本人学部生および大学院生に奨学金を支給する〈高麗大学校青山郭裕之奨学会〉を運営している。本奨学会は、京都ANA(全日空)ホテル郭裕之(中山裕之)会長の支援を受け、高麗大学校に留学を希望する日本人学生に一年間の留学経費を支援している。外国人対象の奨学制度がさほど充実していない現在の韓国の状況において、外国人学生に留学経費を支援する本奨学会は注目を受けている。

奨学生募集広告ポスター

2007年度には第1期奨学生3名、2008年度には第2期奨学生４名を選抜した。2009年度奨学生として早稲田大学、慶應義塾大学、武蔵大学、立命館大学、帝塚山学院大学など日本有数の大学の学部生・院生9名を選抜したのに引続き、今年度第４期奨学生として慶應義塾大学、武蔵大学などから8名を選抜した。

〈高麗大学校青山郭裕之奨学会〉は、日本の若者の韓国留学を奨励し、日韓両国の共存共栄のための次世代リーダー育成と日韓相互理解および友好増進を図り、両国の実践的交流の幅を広げていく上で大きく寄与している。

2010年度第4期奨学生奨学証書授与式

◈ 日本翻訳院

国際化・情報化という現代社会の大きな流れの中で、韓国と日本両国の情報交流増大に対応するため、2007年下半期からの準備期間を経て、日本語専門翻訳機関として日本翻訳院を設置した。また、日本に関する高い専門能力を備えた翻訳者と各分野別の監修者を揃え、迅速で正確な日韓両言語の双方向翻訳を追求している。

❖ 板雨翻訳賞

康志賢氏(左から3人目)

日本翻訳院では、韓国内の日本研究の基盤を整え、日韓翻訳を通じて日本文学の紹介および大衆化に尽力してきた当翻訳院長板雨金春美高麗大名誉教授の業績を記念するために、2008年3月に板雨翻訳賞を創設した。これにより、優秀な翻訳人材の発掘は無論、日韓両国の情報・知識・文化の交流を促進し、望ましい翻訳文化の風土づくりを目指している。

2009年第一回板雨翻訳賞授賞式に続き、2010年10月、第2回板雨翻訳賞大賞受賞者に全南大国際学部康志賢教授が選ばれた。選考委員は金允植ソウル大学校名誉教授、尹相仁漢陽大学校教授、鄭炳浩高麗大学校日本研究センター副所長が務めた。康志賢訳『十返舎一九作品選集』(ソミョン出版、2010)は、江戸時代の大衆小説である原作の文学的、文化的価値をいかんなく伝える翻訳であり、学術的意義が大きいという評価を受けた。

◇ 第3回翻訳賞審査対象

日本語で執筆された書籍(文学作品を中心とする人文書籍)を韓国語に翻訳したもののうち、2009年６月1日から2011年5月31日までに出版された書籍(初版発行年度を基準)

◇ 応募者および推薦対象

- 当該事業年度締切日時点で、日本語または韓国語で書かれた文学作品の翻訳書刊行10冊以下の新進および中堅翻訳家
- 個人申請および出版社推薦可能

◇ 提出書類

- 申請書・推薦書(所定様式)、審査用翻訳書3部、原作1部

◇ 応募先および締切り

住所：〒136-701　大韓民国Seoul市城北区安岩洞5街65番地
青山･MK文化館　高麗大学校日本研究センター日本翻訳院
電話：+82-2-3290-5312（担当者：金孝順）
ファックス：+82-2-3290-2538　e-mail：ijt@kujc.kr
応募締切：2011年5月31日(当日消印有効)

◈ 日本関連文献検索システム構築

当研究センターでは、日本語学、日本語教育、日本文学、日本学などの諸分野における研究論文のうち、韓国研究財団学術登載(候補)誌に収録された論文の著者別、年度別、テーマ別検索システムを構築し、ウェブサイトを通じた検索サービスを提供している。検索可能な研究資料は、学術登載誌(候補)誌に収録された総15,075件の論文であり、定期的にデータ更新を行っている。

ホームページ検索画面

現在、解放以降、韓国で刊行された日本語学、日本語教育、日本文学、日本学に関する学術書を対象に、著者別、年度別、テーマ別検索が可能となるよう、第2次作業を行っている。データベースの構築期間は2年間を予定しており、この構築事業は韓国三菱商社(株)の支援を受けている。

当研究センターの公式ホームページ(http://www.kujc.kr)には、センター紹介、各種事業、機関誌、刊行物等の研究成果を掲載している。また「情報広場」にはセンターの多様な学術行事の情報や写真が掲載されている。ホームページは韓国語・日本語二言語で提供されている。

ホームページメイン画面

機関誌『日本研究』

当研究センターは学術機関誌の『日本研究』を年２回刊行している。2002年2月の創刊号刊行以来、2010年8月現在、通巻14集まで発行されている。

日本語学、日本文学、日本学などの三つの領域で構成される『日本研究』は、語学、文化、文学、歴史、思想、哲学、経済、民俗など「総体としての日本把握」を目指して数多くの優秀な論文を掲載している。国内外の力量のある研究者の投稿論文を厳正な審査を通して掲載するだけでなく、研究者に役立つ多様な特別企画を掲載し、研究の活性化を図っている。

また、『日本研究』は国民国家の枠を乗り越え、学際的な疎通を試みる「脱境界」的学問の地平を開くことを企図している。すなわち、既存の「韓国」「日本」という一国中心的な研究が有する限界や他者表象に潜む慣習的な分析の限界を乗り越えることに主眼を置いている。今後、韓国語と日本語の両国語のみならず、英語論文も掲載していくことで、韓国唯一の国際的学術誌へ成長することが期待される。

高麗大学校日本研究センター機関誌
『日本研究』投稿論文募集要綱

『日本研究』は、日本語学、日本文学、日本学などの〈総体としての日本研究〉を紹介する独創的な研究論文を掲載してきました。また、HK事業とBK事業が主管した国際シンポジウムや海外学者の招請講演会の講演を〈特別企画〉として掲載し、韓国での日本研究を先導する最高の学術誌になるために全力を尽くしています。

『日本研究』は2008年に韓国研究財団の登載候補学術誌に選定され、2009年には1次評価を優秀な成績で通過し、2010年末には登載誌への昇格を目の前にしています。『日本研究』 皆さま方の積極的な投稿をお願い申し上げます。

- 投稿締切り: 6月30日・12月31日(必着)
- 発行予定日: 8月31日・2月28日
- 投稿方法: 原稿は原則として〈アレアハングル2003以上〉にて作成し、e-mailにて提出
- 投稿先: e-mail :kujc@korea.ac.kr
- 投稿規程: 日本研究センターホームページ(http://www.kujc.kr)の [学術誌『日本研究』]の作成要領を参照
- 論文審査料: 論文投稿の際、6万ウォン(審査委員3名)を下記銀行口座へ入金
- 論文掲載料: (審査完了後、掲載可と判断された論文に限る)
一般論文: 10万ウォン, 研究費支援論文: 20万ウォン
- 振込口座: ハナ銀行 391-910005-69105(口座名義：宋浣範〈日本研究センター〉)

2010月 12月
高麗大学校日本研究センター『日本研究』編集委員会

所長動静

◈ 講演・発表・討論

日付	場所	役割	タイトル
3月 11日	南開大学日本研究院	講演	韓国での日本研究
3月 30日	天津社会科学院	講演	グローバル時代における東アジア研究
4月 22日	清華大学日本研究センター	講演	グローバル時代の東アジア理解
5月 7日	2010年東アジア文化交渉学会大会(台湾大学)	発表	東アジア学のための提案
5月 24日	魯東大学	講演	東アジア交流の過去・現在・未来
6月 11日	日中韓文化国際シンポジウム(東京)	基調発表	「文化時代」の日中韓三国の関連様相
7月 31日	京都大学小倉コロキアム	発表	歴史から文学へ-壬辰倭乱(文禄の役)の生んだ謎
8月 19日	世界比較文学大会(ICLA)ソウル大会	発表	韓国における日本古典文学の翻訳
9月 11日	韓国日本学会学術大会	指定討論	江戸中後期の噺本にみられる滑稽美と挿画に関する一考
9月 14日	京都日文研フォーラム	発表	戦争・記憶・想像力-文禄の役(壬辰倭乱)をめぐって
9月 28日	東アジア文化交渉学研究方法論研究討論大会(杭州)	発表	戦争・記憶・想像力
11月 19日	島根県立大学日韓・日朝交流史研究会	講演	グローバル時代における東アジアの在り方
11月 25日	コリアプラザ仙台	講演	文化時代の日韓相互理解
11月 27日	2010年国際交流館国際シンポジウム(東京)	発表	東アジアのグローバリゼーションと大学教育の将来: 高麗大学校と日本研究センターの国際化
12月 3日	台湾大学日本研究論壇	発表	韓国における日本研究の現況と展望
12月 10日	関西大学	講演	東アジアでの壬辰倭乱(文禄の役)の展開様相

◈ 著書・論文

共著 『日本文化事典』(図書出版ムン)

共著 『ジャパンレビュー2010』(図書出版ムン)

共著 『壬辰倭乱関連日本文献解題』(図書出版ムン)

監修 『武士道』(図書出版ムン)

論文 「18世紀を捉える観点」『国際日本学』8号、法政大学国際日本学研究所

◈ その他

『中央日報』インタビュー「『日本文化事典』発刊」(8月12日)

『教授新聞』コラム「ポストモダン時代と日本研究」(11月1日)

事業団動静

(1) 校内附設研究機関の最優秀研究機関に選定

当研究センターは、2010年度高麗大学校附設研究機関119ヵ所を対象にして行われた定期評価で、人文系列の最優秀研究機関に選定された。これは、昨年度の人文社会系列2位に続くさらなる跳躍といえる。最優秀研究機関受賞は、当研究センターの研究力が客観的に裏付けられた結果であり、今後のさらなる躍進が期待される。

(2) 研究者交流

2010年1月と8月に、HK研究教授6名がセンター協定機関である東北大学、関西大学、国文学研究資料館へと派遣された。また、関西大学の篠原啓方氏と大阪大学の宇都宮めぐみ氏を当センター客員研究員として受け入れ、資料調査、研究発表などが行われるなど、センター所属研究者らとの活発な学術交流が行われた。このような双方向の国際研究者交流は、今後も積極的かつ活発に行われることが期待される。

(3) 文化体育観光部優秀図書選定

「日本学叢書」として刊行された研究書のうち、『壬辰倭乱関連日本文献解題-近世編-』(崔官・金時徳、図書出版ムン)『日本語教育と談話分析』(曺英南、図書出版ムン)『恋愛と文明-明治時代日本の恋愛表象-』(宋惠敬、図書出版ムン)が2010年度文化体育観光部優秀学術図書に選定された。また、当研究センター構成員が参与した『教養として読む日本思想史』(高熙卓、朴鴻圭、宋浣範共訳、論衡)が2010年度文化体育観光部優秀教養図書に選定された。

(4) 近畿産業信用組合役員一行訪問

5月1日、近畿産業信用組合の役員訪問団100余名が日本研究センターを訪問した。近畿産業信用組合は、2007年の青山·MK文化館建設の際に多額の寄付金を拠出していただいた兪奉植会長が運営する企業である。訪問団一行は当研究センターの紹介および事業説明をうけ、また高麗大学校のキャンパスを見学した。今回の訪問団の様子は近畿産業信用組合機関紙『きんさん新聞』(5月16日)に大きく報道された。

(5) 上・下半期の親睦行事

4月30日には南漢山城へ、10月31日には北韓山ドゥレギルへ遠足に行った。この行事にはHK研究構成員だけでなく、当研究センター所属の土台研究事業研究教授やBK中日言語文化教育研究団研究教授、研究補助員などの構成員が参加し、和やかな時間を過ごした。今回の機会を通して、構成員間の親睦はもちろんのこと、今後のセンターの発展計画を忌憚なく議論する場ともなり、参加者の再充電の機会となった。

南漢山城遠足

北韓山ドゥレギル遠足

(6) 人事異動

2010年度の人事異動は以下の通りである。

3月 1日 朴宣映、HK研究教授から国民大学校の国際学部専任講師へ離任
5月 1日 姜喆九、金時徳、HK研究教授に着任
5月 1日 柳水晶、日本研究センター研究教授に着任
5月 1日 黄永熙、日本研究センター研究教授に着任
11月 1日 李承信、HK研究教授から日本研究センター研究教授へ異動
11月 1日 宋惠敬、安志英、HK研究教授に着任
11月 1日 鄭有景、日本研究センター研究教授に着任

学術交流参加記

国際シンポジウムに出席して考えたこと

日比嘉高(名古屋大学文学部)

今回のシンポジウムに参加できたことは、私にとって非常に貴重な経験となった。お招き下さった関係者の各位には心より御礼を申し上げたい。会議に参加し、他の参加者と対話しながら考えたことを、与えられたこの機会に少し整理してみたい。

とにかく痛感したのは、「帝国日本の移動と東アジア植民地文学」というテーマを考える際に、単一の言語、同一の研究者集団の中だけで議論を行っていてはならないということである。たしかに、東アジアの近代において「帝国日本」の問題は外して考えられないが、それを日本（語）を起点に考えているだけでは、取りこぼされる問題が多すぎる。

今回のシンポジウムには韓国、台湾、中国、日本の研究者が集まった。韓国からは日本文学だけでなく韓国文学の研究者も参加した。重要だったのは、顔を合わせた研究者たちがそれぞれの母語で発表を行ったということだ。これにより個々の発表の流暢さが増したこともあるが、なにより発表者の口からあふれる理解できない言葉を片耳で聞き、時に流麗に時に滞る翻訳の言葉を片耳のイヤフォンから聞くという、「面倒な」状況が現われたことが、重要だったと私は思う。それは自分の文脈がそのままでは通じない「他者」が存在するということを、身体的に感受する経験だ。私は二日間、右の耳と左の耳で異なる言語を受け取りながら、かつての「帝国日本」の言語の現場に思いをめぐらした。そこは多言語空間だったはずだ。そしてそれを単一の言語にしようとし、あるいは言語間にヒエラルキーを持ち込もうとする権力が存在した。現在の研究は、その暴力を反復してはならない。

同種の問題が、テーマにもあるかもしれない。「移動」は流行の研究課題である。この一年だけで私は何度も類似のテーマ設定を耳にした。移動を考えることは、むろん現代的で必要な課題だ。しかし、テーマを安直に採用するだけでは、流動性の賞揚、固着化させる権力への抵抗などといった紋切り型の結論を唱えて終わりになりかねない。移動を考えることの重要性を大切にしながら、画一的な議論の反復からどう抜け出すか。答えの一つは、やはり翻訳／接触の問題圏にあるかもしれない。翻訳／接触が「事故」をはらむこと。「雑種化」の契機をはらむこと。他者に「さらされる」経験をもたらすこと――。

今回の企画を成功させた高麗大学の日本研究センターが、今後もこの領域で重要な貢献をすることを願っている。

私の韓国滞在記

宇都宮めぐみ(日本学術振興会特別研究員)

日本学術振興会の助成を受け、2010年2月下旬より一年間の予定で、高麗大学校日本研究センターに客員研究員として受け入れていただき、研究を行っている。

現在私は、近代教育史、とりわけ1945年以前に日本に留学していた朝鮮半島出身の女子学生に関する博

士論文執筆のための史料調査を主に行っているが、植民地期の史料を多く所蔵する高麗大学校、そしてそれらの重点的な調査プロジェクトを進めている日本研究センターで、日本に対する多様かつ鋭敏な問題意識をもつ方々のなかで研究を行うことで、実に多くのことを学ばせていただいている。とくに、日本研究センターが主催して行う各種フォーラムや国際シンポジウム、講演会などを通して、内外の一流の研究者と交流する機会を得られたことは大変貴重な経験であり、そこで得た刺激を、更なる研究の発展へとつなげていけるよう、努めているところである。

2010年という年は考えさせられることのとても多い年である。私が韓国へやってきた2月は冬季オリンピックが話題をさらい、3月には天安艦沈没事件、6月にはワールドカップ、そして「6・25戦争」開戦から60年を数える日を、8月には日本の植民地支配からの解放から65年、「韓国併合」から100年を数える日をそれぞれ迎えた年である。私自身、日本を離れて生活すること自体が初めての経験であることもあり、一方では平凡な生活者として、他方では日本に出自をもつ歴史学研究者として、韓国の「これまで」と「今」を見聞きし、体験してきたつもりであるが、同時に日本の「これまで」と「今」にも考えをめぐらせてきた。一年という短い時間で得られるものには限りがあろうが、滞在中に学ばせていただき、得たものを活かし、今後もより一層、思考と言語化・文章化に努めていく所存である。

最後に改めて、この一年間、研究できる機会と快適な研究空間を提供くださり、いつもさまざまにご配慮くださった崔官所長と研究教授の皆様に深い感謝の意を記し、私の韓国滞在記を終えたい。

東北大学東北アジア研究センターへの派遣研修に参加して

全成坤(高麗大日本研究センター)

筆者は当研究センターの国際交流事業の一環として海外派遣短期研修のプログラムにより、日韓交流の増進や研究発表、資料調査などのため、2010年1月11日から1月22日にかけての12日間、東北大学東北アジア研究センターへ派遣された。

東北大学の東北アジア研究センターは、地域研究の新たな方法論の開発や地域研究の新概念の創出、総合的な地域研究の確立、情報の蓄積と発信を目指して、東北アジアの「地域研究」の拠点としての地位を築いている研究所である。研修期間のさなかの1月19日(火)には、礒部彰教授を中心として「東アジアの半島と島々の交流史」をテーマとする学術交流研究会が開催された。筆者は「コロニアリズムの装置としての満州建国大学と朝鮮人」という主題で研究発表を行ったが、文化人類学、歴史学、国文学の研究者が参加したその場では、コロニアリズムの視線や思想、または歴史に関する多くの意見と指摘が出され、有意義な時間を持つことができた。

また、研修期間中は「東北学」研究の先駆者であった喜田貞吉の「東アジア学」を再考するきっかけともなった。喜田貞吉は、東北地方の「蝦夷」と呼ばれる人々が差別されるのは、「作られた古代人の認識」であると主張する日本の代表的な研究者の一人である。このような歴史の記述方法は、民族と国家の枠におけるイデオロギーの問題を説明しうるヒントを与えてくれる。さらに興味深いことは、東北地方を中心に「東北学」という「主体的」な学問が発信されていることである。中央からみる東北というローカル、「蝦夷」が「住む」劣等地域とされた視線の批判的再構成が実践としてなされている。日本内部の「マイノリティー」が「日本」という共同体の中で「同化」と「異化」という二重的アイデンティティを持つとすれば、地域研究の持つ特性もそのような地平からの解釈が可能になるのではないだろうか。

研究業績(HK研究構成員)

◈ 国内外専門学術誌掲載論文

著者	論文題目	学術誌名	発行機関	掲載日
宋浣範	桓武天皇と百済王氏	『日本歴史研究』第31輯	日本史学会	2010.6
	日本律令国家の変容に関する一考察-桓武天皇の交野行幸を中心に-	『日本学研究』第31号	檀国大日本研究所	2010.9
	Issues Regarding Distortion of History of East Asia and Japan's State-Sponsored Textbook	『東北亜レビュー』第5号	亜細亜問題研究所	2010.11
姜喆九	日本のメインバンク制度と企業の資金調達構造	『亜太研究』第17巻 第1号	国際地域研究院	2010.4
	日本の中堅企業に関する研究：現況と特徴、政策を中心に	『中小企業研究』第32巻 第2号	韓国中小企業学会	2010.6
	日本のメインバンク制度と企業支配構造の変化	『社会科学研究』第36巻 2号	社会科学研究院	2010.8
高永爛	江戸時代の文学と貧乏神	『日本文化学報』第44輯	韓国日本文化学会	2010.2
	前近代韓日両国の女性談に関する小考	『日本研究』第28輯	中央大学校日本研究所	2010.2
	映像の中での遊女と妓女	『日本近代学研究』第28輯	韓国日本近代学会	2010.5
	描かれた遊女と妓女	『比較文化研究』第92号	日本比較文化学会	2010.6
金仙熙	「排耶蘇」にみる林羅山の儒学思想に関する一考察	『日本文化研究』第33輯	東アジア日本学会	2010.1
	韓国における「歴史叙述」の問題-林泰輔『朝鮮史』の受容を中心に	『東アジア文化交渉研究』第3号	関西大学文化交渉学教育研究拠点ICIS	2010.3
金青均	川端康成の『名人』論-囲碁文化との関連を中心に-	『日本文化学報』第46輯	韓国日本文化学会	2010.8
	日本語雑誌『朝鮮』(1908)の歴史物と韓国表象	『日本学報』第84輯	韓国日本学会	2010.8
金孝順	植民地朝鮮での渡韓日本女性の現実	『日本研究』第13輯	高麗大学校日本研究センター	2010.2
	伊藤整の『変容』論	『日本学報』第83輯	韓国日本学会	2010.5
	芥川龍之介の初期文学の女性像と翻訳	『翰林日本学』第16輯	翰林大学校日本学研究所	2010.5
	〈半開〉の翻訳とアジア民族の主体形成	『日本近代学研究』第28輯	韓国日本近代学会	2010.5
	李箱の文学と芥川龍之介	『Comparative Korean Studies』 Vol.18 No.2	The International Association of Comparative Korean Studies	2010.8
金姫廷	国名･地名を表す語彙の比較考察―1945年から1960年までの韓日流行歌を中心に	『日本近代学研究』第28輯	韓国日本近代学会	2010.5
	韓日流行歌の自嘲を表す語彙の考察	『日本語文学』第45輯	韓国日本語文学会	2010.6
宋惠敬	文明開化期、男女交際論の受容と展開	『総合女性史研究』 第27号	総合女性史研究会	2010.3
	雑誌『朝鮮』における家庭の役割と韓人家庭に関する認識	『翰林日本学』第16輯	翰林大学校日本研究所	2010.5
安志英	複合辞に関する通時的研究-「ところが」と「ところで」を中心に-	『日本研究』第13輯	高麗大学校日本研究センター	2010.2
	複合辞に関する通時的研究-「～どころか」と「～どころではない」を中心に-	『外国学研究』第14巻1号	中央大学校外国学研究所	2010.6
	複合辞に関する通時的研究-「とばかり(に)」「ん(ぬ･ない)ばかり」「ばかりに」を中心に-	『日本語文学』第50輯	日本語文学会	2010.8
	要求･依頼を表す複合辞「～てほしい」の通時的研究	『日本学報』第84輯	韓国日本学会	2010.8
李承信	日本語文学にあらわれた渡韓日本人女性	『日本研究』第29輯	中央大学校日本研究所	2010.8
全成坤	沖縄主体の記録と沖縄歴史学-伊波普猷と柳田国男を中心に-	『東アジア古代学』第21輯	東アジア古代学会	2010.4
	『朝鮮史』と崔南善	『季刊日本思想史』第76号	ぺりかん社	2010.6
	喜田貞吉の公談論形成の考察-浜田耕作との論争を中心に-	『日本文化研究』第35輯	東アジア日本学会	2010.7

◈ 国内外学術単行本

著者	著書名	発行所	発刊日
宋浣範	(共著)『麗水を開くと世界が見える』	麗水文化院	2010.1
	(共訳)『教養として読む日本思想史』 (原題:苅部直･片岡龍編『日本思想史ハンドブック』)	論衡	2010.2
	(共著)『古代東アジアの再編と韓日関係』	景仁文化社	2010.3
	(共著)『ジャパンレビュー2010』	図書出版ムン	2010.4
	(共著)『東アジアの中での韓日交流史(上)-半島と列島との交流』	J&C	2010.5
	(共著)『日本文化事典』	図書出版ムン	2010.7
	(共著)『韓日歴史争点論集 前近代篇』	東北亜歴史財団	2010.11
	(共著)『東アジア国際関係史』	亜細亜問題研究所出版部	2010.11
姜喆九	(共著)『日本文化事典』	図書出版ムン	2010.7
高永爛	(訳書)『武士道』(原題:新渡戸稲造『BUSHIDO-The Soul of Japan』)	図書出版ムン	2010.2
	(共著)『幻想と怪談』	図書出版ムン	2010.7
	(共著)『日本文化事典』	図書出版ムン	2010.7

著者	著書名	発行所	発刊日
金仙熙	(訳書)『共に行う多文化教育』(原題:倉地暁美『多文化共生教育』)	図書出版ムン	2010.3
	(訳書)『江戸儒学と近代の知』(原題:中村春作『江戸儒教と近代知』)	ソンイン	2010.7
	(共著)『日本文化事典』	図書出版ムン	2010.7
金時德	(共著)『壬辰倭乱関連日本文献解題-近世編』	図書出版ムン	2010.5
	(訳書)『怪談』(原題:Lafcadio Hearn『怪談』)	図書出版ムン	2010.8
金青均	(共訳)『完訳日本語雑誌『朝鮮』文芸欄(1908年3月～1909年2月)』(原題:雑誌『朝鮮』文芸欄)	図書出版ムン	2010.3
	(共著)『日本文化事典』	図書出版ムン	2010.7
	(共著)『帝国の移動と植民地朝鮮の日本人-日本語雑誌『朝鮮』(1908～1911) 研究-』	図書出版ムン	2010.10
金孝順	(訳書)『月島物語』(原題:四方田犬彦『月島物語』)	図書出版ムン	2010.3
	(共訳)『完訳日本語雑誌『朝鮮』文芸欄(1908年3月～1909年2月)』(原題:雑誌『朝鮮』文芸欄)	図書出版ムン	2010.3
	(共著)『日本文化事典』	図書出版ムン	2010.7
	(共著)『帝国の移動と植民地朝鮮の日本人-日本語雑誌『朝鮮』(1908～1911) 研究-』	図書出版ムン	2010.10
金姫廷	(共訳)『完訳日本語雑誌『朝鮮』文芸欄(1908年3月～1909年2月)』(原題:雑誌『朝鮮』文芸欄)	図書出版ムン	2010.3
	(共著)『日本文化事典』	図書出版ムン	2010.7
宋惠敬	(共訳)『完訳日本語雑誌『朝鮮』文芸欄(1908年3月～1909年2月)』(原題:雑誌『朝鮮』文芸欄)	図書出版ムン	2010.3
	(著書) 『恋愛と文明-明治時代日本の恋愛表象』	図書出版ムン	2010.3
	(共著)『日本文化事典』	図書出版ムン	2010.7
	(共訳)『〈植民地〉日本語文学論』(原題:神谷忠孝･木村一信編 『「外地」日本語文学論』)	図書出版ムン	2010.9
	(共著)『帝国の移動と植民地朝鮮の日本人-日本語雑誌『朝鮮』(1908～1911) 研究-』	図書出版ムン	2010.10
李承信	(訳書)『近代日本の恋愛観』(原題:厨川白村『近代の恋愛観』)	図書出版ムン	2010.3
	(共訳)『完訳日本語雑誌『朝鮮』文芸欄(1908年3月～1909年2月)』(原題:雑誌『朝鮮』文芸欄)	図書出版ムン	2010.3
	(共著)『日本文化事典』	図書出版ムン	2010.7
全成坤	(訳書)『古琉球の政治』(原題:伊波普猷『古琉球の政治』)	ジマンジ	2010.4
	(共著)『日本韓人の歴史』(下)	フリースタイル	2010.7
	(共著)『日本文化事典』	図書出版ムン	2010.7

◈ 国内外学術大会発表

発表者	発表題目	発表学会および大会名	発表場所	発表日
宋浣範	日本律令国家と百済王氏	第11回東北大学東北アジア研究センター学術交流研究会	日本 東北大学東北アジア研究センター	2010.1.19
	日本歴史教科書100年の歪曲	第76回コンサート日本研究会定期発表会	高麗大学校日本研究センター	2010.1.27
	日本歴史教科書100年の歪曲-古代を中心に-	韓国日本学会第80回学術大会	漢陽大学校	2010.2.5-6
	日本律令国家と百済遺民の研究	第22回日韓･日朝交流史研究会	日本 島根県立大学北東アジア地域研究センター	2010.6.4
	昨年の眺望と新年の計画	[ジャパンレビュー2011]第1回ワークショップ	高麗大学校日本研究センター	2010.8.12
	8世紀新羅と日本の対抗意識	韓国日本学会2010年傘下学会連合学術大会	翰林大学校	2010.9.11
	韓日強制併合100年、新しい100年	フォーラム東北亜研究会9月定期研究会	高麗大学校日本研究センター	2010.9.18
	戦争から見る東アジア-白村江の戦いと壬申の乱-	第11回中国韓国学国際学術大会	中国 山東大学	2010.10.12-15
	2011年歴史学の展望	[ジャパンレビュー2011]第2回ワークショップ	高麗大学校日本研究センター	2010.11.26
	古代のディアスポラ-帰化人・渡来人・流民を中心に-	第18回建国大アジアディアスポラ研究所学術大会	建国大学校	2010.12.16
姜喆九	日本のEPA戦略と東アジア共同体に対する批判的検討	第25回韓日経済経営国際学術会議	済州大学校	2010.8.19
高永爛	日韓奇人談に関する一考察	2010年世界日本語教育大会	台湾 政治大学	2010.7.31
	奴の小万の文芸化に関する一考察	韓国日本学会2010年傘下学会連合学術大会	翰林大学校	2010.9.11
	豆右衛門に関する一考察	韓国日本思想史学会第1回定期学術大会	淑明女子大学校	2010.10.9
金仙熙	林泰輔『朝鮮史』、その後100年-韓国における「歴史叙述」の問題	第29回アジア文化交流研究センター研究会	日本 関西大学	2010.1.22
金時德	近世後期の壬辰戦争文献群-対馬藩と水戸藩の場合	第58回書物･出版と社会変容研究会	日本 一橋大学	2010.6.5
	近世日本の対外戦争言説について-蝦夷戦争文献群の場合	韓国日本学会2010年傘下学会連合学術大会	翰林大学校	2010.9.11
	蝦夷戦争文献群の展開と異国征伐軍記の論理	韓国日本思想史学会第1回定期学術大会	淑明女子大学校	2010.10.9
	近世中期の歴史小説におけるの壬辰戦争前後史の記述	第11回韓日軍事文化学会	陸軍士官学校	2010.11.26
	東アジア平和構築の困難-壬辰倭乱の和議交渉関連者に対する三国の評価を通じて	高麗大学校日本研究センター国際学術会議	高麗大学校日本研究センター	2010.12.3
	中･日の文献との比較による国立中央図書館蔵『唐四柱』の分析	第1回絵入り占書国際的比較研究会	日本 慶應義塾大学	2010.12.18

発表者	発表題目	発表学会および大会名	発表場所	発表日
金青均	村上春樹の『1Q84』論-〈均衡〉と〈引き寄せ〉の意味を中心に-	韓国日本学会第80回学術大会	漢陽大学校	2010.2.5-6
	韓日併合前後の日本語雑誌における韓国史観-日本語雑誌『朝鮮』と『朝鮮公論』の歴史物を中心に-	高麗大学校日本研究センター国際学術シンポジウム	高麗大学校	2010.10.7-8
	漫画·アニメーションにみる日本の囲碁文化-『ヒカルの碁』を中心に-	第11回東アジア比較文化国際会議日本大会	日本 奈良 橿原ロイヤルホテル	2010.10.23-25
金孝順	李箱と芥川龍之介文学のモダンガール	国際比較韓国学会第19回国内学術大会	全南大学校	2010.5.8
	李箱と朴泰遠文学における女性と芥川龍之介	第19回国際比較文学大会	中央大学校	2010.8.19
	韓国モダニズム文学における日本語創作-鄭芝溶の日本語詩作を中心に	高麗大学校日本研究センター国際学術シンポジウム	高麗大学校	2010.10.7-8
	李箱文学の不安と牧野信一	第11回東アジア比較文化国際会議日本大会	日本 奈良 橿原ロイヤルホテル	2010.10.23-25
金姫廷	煽動を表す語彙の考察	日本近代学会第22回国際学術大会	日本 国士舘大学	2010.11.5-6
宋惠敬	1930年代韓国女流作家たちの日本語創作	第19回国際比較文学大会	中央大学校	2010.8.19
	プロレタリア作家の朝鮮体験と朝鮮認識	韓国日本学会2010年傘下学会連合学術大会	翰林大学校	2010.9.11
	佐多稲子の朝鮮体験と二言語状況認識	高麗大学校日本研究センター国際学術シンポジウム	高麗大学校	2010.10.7-8
安志英	願望·依頼を示す複合辞-「～てもらいたい」の通時的研究-	韓国日本学連合会第8回国際学術大会	南ソウル大学校	2010.7.1-3
	複合辞の史的研究-適当·願望·提案を表す複合辞を中心に-	韓国日本学会2010年傘下学会連合学術大会	翰林大学校	2010.9.11
	複合辞の通時的考察-添加を表す「～ばかりか」を中心に-	韓国日本言語文化学会2010年秋季国際学術大会	明知大学校	2010.11.13
李承信	雑誌『朝鮮』からみた在韓日本人女性	韓国日本学会第80回学術大会	漢陽大学校	2010.2.5-6
	雑誌『新女性』における恋愛結婚談論の研究	第19回国際比較文学大会	中央大学校	2010.8.19
	韓日両国の同性愛文学研究	第11回東アジア比較文化国際会議日本大会	日本 奈良 橿原ロイヤルホテル	2010.10.23-25
全成坤	コロニアリズムの装置としての満州建国大学と朝鮮人	第11回東北大学東北アジア研究センター学術交流研究	日本 東北大学東北アジア研究センター	2010.1.19
	阿部吉雄の退渓学理解と日本伝導	国際退渓学会上半期学術大会	大邱郷校 儒林会館	2010.4.24
	学知と帝国のセルフオリエンタリズムの間で	第8回翰林大学校日本学研究所ワークショップ	翰林大学校	2010.6.11
	日本人種論から日本臣民論へ	韓国日本学会2010年傘下学会連合学術大会	翰林大学校	2010.9.11
	韓国学の創出と崔南善	第11回中国韓国学国際学術大会	中国 山東大学	2010.10.12-15
	1930年代における朝鮮学の論理と朝鮮学	2010年度『與猶堂全書』定本事業学術大会	プレスセンター	2010.10.29

2011年度 事業計画

◆ 学術大会

	日付	大会名および特記事項
上半期	5月7-9日	中国・武漢にて東アジア文化交渉学会の中国大会開催予定 テーマ: 辛亥革命100年の歴史遺産
	5月 下旬	台湾政治大学主催の〈日本研究者共同発表大会〉 高麗大学校日本研究センター、BK21中日言語文化教育研究団、北京日本学研究センターとその他主催側の招請研究者で構成
	6月 下旬	高麗大学校日本研究センター、天津社会科学院、南開大学との〈共同発表会〉開催並びに本研究センターワークショップを予定
下半期	8月3-5日	中国・西安大学にて高麗大学校日本研究センター、日本解釈学会、中国社会科学院との共同主催で国際学術大会開催予定
	9月30日-10月1日	本学にて日本近世文学会秋季学術大会を開催予定 権威ある日本文学学会である日本近世文学会初の海外国際学術大会であり、高麗大学校日語日文学科と高麗大学校日本研究センターが主管
	11月	台湾政治大学と〈植民地日本語文学·文化研究会〉との共同学術大会を予定

上記の学術大会のほか、定期的に特別講演会やコロキウム、日研フォーラムを開催する。来年は高麗大学校日本校友会長である崔相英ヤングスチール代表の特別講演が予定されており、東京大学の齋藤希史教授のコロキウムも予定されている。

◆ 研究会

❖ 植民地日本語文学·文化 研究会

〈植民地日本語文学·文化研究会〉は「アジア的な視角からの日本研究」「日本文化研究の発信」という目標のもと、2008年1月に発足して以来、定期的な資料講読会や研究会を通じての学術活動を展開している。

その成果として2010年には朝鮮半島最初の日本語総合雑誌『朝鮮』(1908～1911)の〈文芸欄〉の1次年度分を完訳した『完訳日本語雑誌『朝鮮』文芸欄』(図書出版ムン、2010.3)と研究書『帝国の移動と植民地朝鮮の日本人』(図書出版ムン、2010.10)、翻訳書『〈植民地〉日本語文学論』(図書出版ムン、2010.10)を刊行した。そして、10月には「帝国日本の移動と東アジア植民地文学」をテーマに国際学術シンポジウムを開き、韓国、日本、中国、台湾の植民地(外地)日本語文学の研究状況や、課題と展望についての議論を行った。

2011年度には2010年度の研究成果をもとに、同じ時期に植民地支配を経験した台湾と韓国の「皇民文学」と「親日文学」を比較・検討する研究を進め、台湾政治大学と共同シンポジウムを開く予定である。また2010年度のシンポジウムの成果をもとに『帝国日本の移動と東アジア植民地文学』(2011年6月刊行予定)を刊行するとともに、『朝鮮』2次年度分の〈文芸欄〉完訳本も出版する予定である。

❖ 韓国型日本語プログラム研究会

〈韓国型日本語プログラム研究会〉では、日本語学·教育研究室を主軸に、「韓国人日本語学習者に対する体系的な学習支援システムの構築」という目標のもと、既存の千篇一律的な日本語教育方式から脱皮した新しい環境の開発や創造、提供を最優先課題として設定している。

この過程において、一国言語の単純な習得に片寄っている従来の日本語教材とは一線を画す、新しい形の教材開発の必要性が明らかとなったことから、日本語学·日本文学·日本学などの諸関連分野の専門家12名が集まり、〈韓国型日本語プログラム研究会〉を発足させ、持続的な研究・発表会とワークショップなどを行っている。

この成果として、2011年には読解用テキスト『人文学としての日本語(仮)』を出版する予定である。既存の読解用テキストの弊害として指摘されてきた語彙や文型の単純な提示ではなく、「日本語を通して考える人文学的パラダイム」といった人文学諸分野を含む専門的内容、かつ興味を起こさせる内容で構成されており、日本研究を志す初学者用のテキストとして有意義なものとなるであろう。

❖ 東アジアの戦争と平和、そして共同体研究会

1990年代末以降、東アジアでは地域統合の動きが加速化しているが、歴史的・文化的背景の多様性と相異なる政治構造により、実際の共同体形成は難しい状況にある。したがって、政治・経済的共同体構築の前段階として、文化的交渉の実現可否とその可能性の確認が必須であると考える。また韓国は世界唯一の分断地域であることからも、東アジア地域における平和を構築するために東アジア共同体に関する議論は必須の課題といえる。

〈東アジアの戦争と平和、そして共同体研究会〉は、このような東アジア共同体研究の必要性を実感しつつ、2011年度には、HK研究教授らによる研究発表や共同研究を通じて学際的研究成果を提示しうる場として、月2回の定期セミナーを開催する予定である。また、研究力向上のため、四半期別に専門家を招聘し討論会も行う予定である。こうした成果を基礎として、韓国際学術シンポジウムおよび共同研究を推進する計画である。

研究センター 構成員

1. 所長

崔官

2. 3院 6室

国際交流·教育院院長 **崔官**
日本翻訳院院長 **金春美**
日本情報資料院院長 **蔡盛植**

副所長兼日本文学·文化研究室室長 **鄭炳浩**
日本語学·教育研究室室長 **蔡盛植**
日本歴史研究室室長 **趙明哲**
日本思想·宗教研究室室長 **朴鴻圭**
日本政治·経済研究室室長 **徐承元**
在日コリアン·在韓日本人研究室室長 **鄭燦源**

3. HK共同研究員

文正仁 延世大学校 教授　**朴光賢** 東国大学校 教授　**李成圭** 仁荷大学校 教授

4. HK教授

宋浣範

5. HK研究教授

姜喆九　高永爛　金仙熙　金時德　金青均
金孝順　金姫廷　宋惠敬　安志英　全成坤

6. 土台研究教授

金嶸敏　金泰賢　朴恩姫　朴熙永　梁美錫
嚴仁卿　趙美京

7. センター研究教授

金成恩　柳水晶　李承信　鄭有景　黄永熙

8. 行政職員

全賢珍　李暻美